

ハンマー10話

第1話 鉱山（ヤマ）師とつきあう法（その1）

（株）復建技術コンサルタント 吉川謙造

私は今の仕事に就く前に鉱山会社に勤務していた事があるので、今でも世間ではヤマ師と呼ばれる人との付き合いがある。

ヤマ師といえば、一発勝負でひと山当てようと、ひたすら目論んで、他人をだましたり、ホラばかり吹いている人、甲斐性のない人、等の印象が強く、まともな人の分類には入れてもらえないのが通り相場となっている。

しかし、私の知っている人達は良く付き合い合えるほど、人間味があふれ、親しめる人ばかりである。ただ他の人より少しばかり大きなロマンを持っていて、この夢を追い求める時は前後の見境いがなくなり、それこそ妻子をもかえり見ず自分の道をつき進む、といったタイプの人間なのである。

そして、一度親しくなってしまうとトコトン真意をもって付き合い合ってくれる人達でもある。

自分の持っている鉱区（或いは他人のモノ）を少しでも高く売り付けて、しばらくの間は豪華に暮らしてやろうという魂胆であるから、海千、山千の駆引きは彼等の常とう手段である。

学校の採鉱学講座では、ヤマ師たちが鉱山技師をだますテクニックをソールティング（塩加減、手加減という意味）とって色々教えてくれる。

探鉱坑道の切羽近くで砂金粒を散弾銃につめて発射しておく。（どこをサンプリングしても金がザクザク出て来る。）とか、技師の採取したサンプル袋に夜中に注射器で金粒を注入して知らん顔

をしている。（帰って分析するとびっくりするほど高品位が出る）等々…

昔は、こんなのにコロッとだまされた人も少なからず居たという。

ヤマ師との初めの出会いは大抵、先方が品位の高そうな鉱石など、“旨い話”を持ち込んで来ることから始まる。

それでは一つ調査してみよう、というわけで、鉱山会社からは若い地質技師（すなわち私）が派遣されることになる。

あらかじめ打合せた駅に着くと、そこには50年配の一癖も二癖もありそうな人物が三人も物々しい出立ちで待ち構えている。“調査はとりあえず明日、今日は先ずゆっくりして”というわけで早速黒塗りの高級車で旅館に案内され、その晩は例のごとく下へも置かぬもてなし…、酒浸りにさせられるのである。

そして散々“大鉱床は間違いなくある”、“今買わねば別の鉱山会社に話しを持って行ってしまおう”等々、今までに当たった大直利（なおり）の自慢話を吹き込まれる。ちなみに今回の鉱区の値段は1千万円である。こちらが未だ若僧であるので言いたい放題である。

かくして、先入観念を植え付けられた翌朝、いよいよその“大鉱床”の露頭へと案内される。

見るとそこには、小さな斜坑が1つあり、坑口の周囲にはひと目でそれと判る高品位鉱がゴロゴ

ハンマー十話をお届けします。

このハンマー十話は、昭和60年3月の技術ニュースNo.5より平成2年6月の大地2号まで、5年にわたり連載されました。

筆者は、（株）復建技術コンサルタント社長の吉川謙造氏です。

ハンマーをとおして関わりのあった人と自然との出会いを軽妙に描きながら、人と自然との出会いのすばらしさをうたっています。

平素報告書の文章に慣れ親しんだ我々にとって、このハンマー十話は人間のすばらしさを教えてくれます。特に、若い年代の方々には、是非読んでいただきたく再掲載しました。

広報委員会

口と置いてある。

鉱石をひ押し（鉱脈に沿って掘り進むこと）で掘り下ったらしく、天盤には鉱脈らしきものが露出している。しかし、坑道は坑口から2～3mの所で水没しており、中の様子は全く判らない。

「こんなに水没して居たのではだめだ、水を汲み出して中を調査してみないと判らない。」と言うと、相手はニヤリとして、「よし、それでは明日ポンプを持って来て水を汲み出しましょう。しかし、中までずっと良い鉱脈が続いていたら、値段は5千万円になりますゾ、良いですか」と来た。

そんなにまでナメられてはたまらない、こっちとしても地表部の調査だけでとにかく判断を下さねばならない。

そこで相手のうちの一人を助手にして間縄持ちをさせて、周囲のマッピングにとりかかった。岩石の露頭は所々にあってかろうじて地質構造は推定できたが、鉱脈の露頭は皆目どちらへ走っているのか、転石すらみつからず、見当もつかない。

半日程相手をひっぱりまわして、そろそろくたびれた顔をしはじめた頃、最後に確認しようとした鉱区外の露頭で基盤と思われる花崗岩をみつけた。

この花崗岩は鉱石を運んで来た岩石であるが、これにぶつかると鉱脈は消滅するのが通例である。そこで、花崗岩がすぐ近くにあるということは、鉱脈の根も比較的浅いと見当がついた。特にむづかしい理論でも何でもない。気がついてみれば小さな鉱区の中ばかり見ずに、すぐそばの隣の鉱区を見ればすぐに判ったことであった。

ここまでくれば、後は簡単である。しかし、新進気鋭の鉱山技師は、そう簡単には手の内を見せない。「今日は、このへんで終りにしましょう。あとは宿に帰って解析してみます」といって採取したサンプルに試料番号をマジックで書いて袋につめる。KY420803。「それ何の暗号ですか？」相手が不思議そうに首をひねる。何のことはない名前前の頭文字と年月日、Noを書いただけだ。説明して安心させてやる。

宿に帰り風呂に入って夕食を済ます。今夜は地質解析をやりますからといって、酒はホドホドにして切りあげて、野帳をとり出し露頭に着色し、プロトラクターなどを使って断面図らしきものを仕上げて行く。みんなめずらしそうに見ている。

やおら「わかりました。」と大きな声を出す。

「それでどうでしょうか、鉱石はあるでしょうね。」とやや心配げな顔付きが返って来る。

「鉱石は下にはありません。花崗岩がこう…下に入って来て、鉱脈が切られています。」

「ほう…判りますか。」

「もちろんです。」

「ふーむ、えらいものだ。大したものだ。」

彼等3人は実に神妙な顔になって互に顔を見合せてしきりにうなづきはじめた。

どうやら図星であったようだ。

「ところで、いくら位なら買ってもらえるでしょうか…500万、100万、いや50万円、いくらでも良いですから何とかならんでしょうか？」もう完全にこっちのペースである。

この鉱区は結局買わないことになったが、それ以後、相手の態度は一変した。

「先生、今度こんな鉱石が出ましたので、一遍、見に来てくれませんか。良いモノかどうか、是非調査して判定して下さい。」こういう具合なのである。

そのうちにどんどんエスカレートして来る。他のヤマ師が持込んだ話を仲介したりする時、一緒に先方までついて来てくれて、「この先生は大変エライ人で坑口に立って一目見るだけで、地中深くにどれだけの品位の鉱石がどれだけの量埋っているのか、ピタリと当ててしまうのだ。」などと、いやもう穴があいたら入りたくなくなるような紹介をされて当惑することになる。

この人達とは、その後ずっと長いつきあいで、嫁さんを押しつけられそうになったことなどもあったが、今でも、鉱区図面や品位マップ、鉱石などを送ってよこして相談を受けたりしている。

しかし、遠く隔れた所に来てしまったので、今は現地に行って“一目でピタリ”をしてやれなくなったのは、誠に残念である。

第2話 鉱山（ヤマ）師とつきあう法（その2）

人生は多くの人との出会いである。他人に自分を認めてもらうには最初の出合いの時に強烈な印象（それも良い印象）を与えるのが最も効果的である。

この一瞬で相手に自分の売込みが成功すればあとは少々ペースダウンしてもかまわない。反対に出鼻に相手のカウンターパンチをくらってしまうと仲々立直れない。場合によっては一生涯頭が上らないことになってしまうことさえある。

私は少しばかり碁が強い。といってもアマチュアなのだから神様やプロ棋士のように強いわけではない。平均的な人よりほんのちょっと強いだけである。

新入社員としてある鉱山会社の鉱業所に勤務した初出勤の日、所属課の上司と昼休みに対局した（履歴書の特技に囲碁と書いておいたので、それが目にとまって、上司から声をかけられた）

手合は私に対して相手が3子置いて始まった。盤の周囲は黒山の人ばかりである。

私に来る前はその上司が職場内では一番強いことになって居たので、その人が黒を持って、しかも3子を置いて打つので、みんながどんな碁を打つのかと注目したわけである。

対局がはじまるとすぐに隅で戦争がはじまった。先方は今まで自分より弱い相手とばかり打っていた習慣からか、すぐに白石を取りに来たが、どっこいこの日は白の打つ手打つ手がみんなツボにはまって何と打った黒石をことごとく殺してしまったのである。一生に二度とないような大勝である。まだ、全体の2/3以上残した状態で相手はあわてて石を崩して、今度は4子置いて打ち直したが、周囲の観客の目には、日頃のうっぶんが晴れたと言わんばかりの色が浮んでいた。

ところが、それからその人の碁は驚くように変化した。私と対局する時はまったく別人のように

手が畏縮してしまうのである。完全に生きている石にもう一手、手を入れてみたり、こっちが死んだとあきらめている白石を取りに来なかったり。いやもう大変に楽なのである。

他の人と打っている時などは、実に危っかしい自分の石を放り出してても他人の死にそうもない石を取りに行く人が、である。（ちなみにこの人の棋力は現在アマチュア2段ということで、今年の年賀状にもうあんなミットモない負け方はしないと書いて来られた）当然私の強さは誇大宣伝されて鉱山中にパッと広がってしまった。

お蔭で、鉱山の囲碁大会ではいつも優勝候補の筆頭でこっちが必死に打って負けても相手は年寄りに花を持たせてくれたと感謝してくれ、勝っても負けても大したものだ、あの人は強いのだという評判はなくならなかったのである。

鹿児島島の金山開発で少々マスコミに騒がれて有名になった人が居る。この人は自分のことを日本最後の金山ヤマ師と称している。仮にMさんと呼んでおこう。

たった一度しか鉱山調査でお会いしていないのに、どうしたわけかMさんは大層私のことを気に入ってくださり、自分が開発を手がけた鉱山の経営をすべて引き継いでほしいとまで言って下さる。

私にはとても大勢の生活を自信をもって引き受ける力も度量もないので、御期待に沿いかねているが、何とかできる限りの力添えをしてあげたい人である。

Mさんはすでにかかなりの高令であるが、鹿児島県人特有の反骨精神に富む人で、三井、三菱、住友など大財閥はことごとく嫌っており、これら大企業が援助を申し出てもガンとして受け付けない。従って今でも孤立無縁で頑張っておられる。

非常に苦勞されている別のヤマ師の指導と技術援助を財閥系の親会社に進言して少しばかり経

営方針を批判したレポートがたまたまこのMさんの目にとまったらしく、その後私が九州から仙台へやって来た後に、色々とお便りや資料をいただき、今もずっと親しくしていただいている。

Mさんから聞かされた鉱山のエピソードをひとつ紹介しておこう。

Mさんは中央の大学の法科を出た人であるが、ふとした事から鹿児島県内で戦時中の鉱山経営をまかされ、大変に苦勞されたが、幸いにも大富鉱体を掘り当てて、大いに稼ぎ、鉱山の全従業員に馬肉と焼酎の大盤振る舞いをして、零戦一機を国に寄付したという人である。

金や銀のように高価な貴金属を産する鉱山では鉱内夫の鉱石持ち帰りを厳重に取り締るのが普通である。

銅・鉛・亜鉛のような卑金属を産する鉱石であればたとえ100kgをかつぎ出したとしても、時価数千円（今の貨へい価値にして）にすぎないし、たとえ持ち出せたとしても鉱石は硫化物で製錬しなくては金属としては使えず、又、製錬しようとしても大手の製錬所ではわずかばかりの鉱石は買ってはくれはしない。だからこのような金属類の鉱石はサンプルとしてか、床の間の置物位の価値しかないので持ち帰っても殆ど文句は言われまい。

一方、金の鉱石であれば、このままでも売れる自然金が含まれているのが普通で、10グラム持ち出しても3万円以上の価値がある。

鹿児島の金鉱石には“トジ金（きん）”又は“石金（かね）”などと言って、自然金の濃集部が肉眼で見えるようなものを産する事が稀ではない。このような鉱石を掘っている時は、持出しを何とか阻止しないと鉱山会社はちっとも儲らない。

採掘現場から坑外に出る時は身体検査はもとより、弁当箱の中身や口の中まで毎日きびしいチェックが行われたという。

ところが、今は労働基準法で女性の坑内労働は

禁じられているが、戦時中はそんな事はなく、炭坑でも金属鉱山でも多勢の女子労働者が働いていた。

面倒なのはこの女子坑内員の身体検査である。口の中などはうがいさせれば良いが、さすがに荒くれ男の親方も体の隅々まで全部調べるわけには行かなかったという。

そこで考案したのが、溝跨ぎという方法で、幅1メートル位の水槽に水を張っておいて、この上をまたいで通らなければ鉱山事務所から出られないようにしたのである。当時女性は下着は今のよう落下物を支えられる構造にはなっていなかったもので、隠し持った金鉱石はどこにもひっかからずポチャンと水の中へ落ちて、無事鉱山側へ回収されると次第である。

このようにして、双方の知恵くらべなどもあったが、完全に鉱石の持出しを防止することはできなかったという。それでも結構鉱山も儲けたので良き時代であった。

Mさんは立派な体格をしたはなはだ温和な人であるが、ニコニコしながらこのような話しをして下さるのである。

Mさんはいつも鉱山調査に出かける時は、どちらの方面へ調査に行くというような事は自分の家族に話すが、自分がもし調査の予定が過ぎても帰らない場合は絶対に遺体の捜索を行わないように言い含めているという。

これは単独行の鉱山調査では、何十年も昔に掘った崩れかけた旧坑に入って調査することもまれではなく、もしこの中で酸欠、落盤、転落等の事故で死んだ場合は、九州南部地区にある何百、何千という旧坑の中から自分の遺体を見つけ出すのはほとんど不可能に近いという判断からである。

このように沢山の旧坑があるということは、未だ未だ開発されていない有望地帯が南九州には多数残されている証拠であると言って、Mさんは今日も一人で鉱床調査に歩いている。

第3話 鉱山（ヤマ）師とつきあう法（その3）

今回は私がヤマ師として他人から少々恐れられた話しをしよう。

仕事上良く長距離の夜行列車に大きなリュックサックをかついで、登山靴姿で乗ったりするので、山登りでもするのかと聞かれるが、鉱山の調査をしていると話すと、大抵の人はびっくりする。

特にうら若い女性などは、ひどく驚く。どうしてかという、鉱山なんていうものが日本に存在するとは思っていないのだ。西部劇のゴーストタウンかなにか、テレビ映画にでも出て来るものしか知らないのだ。

あるいは、日本の鉱山は戦争中にすべて掘り尽して今はどこにも残っていないと思っているのだ。だから、相当にいいかげんな話をしたとしてもみんな意外と感心して聞いてくれる。

その時は少しばかり、男らしい職業としての鉱山の良さや地質屋の苦労話などをして、マイニングエンジニアの宣伝をさせてもらうことにしている。

15年程前のことである。広島県内の某金鉱山の周辺を調査したことがある。

鉱山の所有者は、もとはお百姓さんである。この人は、鉱山にはまったくの素人であったが、自分の畑にゴロゴロしている白い石（石英脈）が、もしかしたら何かの鉱石かも知れないと思い、大学の先生の所へ持って行った。その時は「これはただの石英です。有用な金属は入っているとは思われません。もし鉱石になるようなことがあったら、金が銀くらいのものでしょう。」という話しをうけたまわった。

この人は、地質や鉱床学の知識をほとんど持っていなかったが、人生何が幸いするか判らない。先生の話しの前半は少しも意に介することなく「（…があつたら）金が銀くらいのものでしょう。」という言葉だけが頭に残り、それじゃ金と銀の分

析を試みようということで、通産局（又は造へい局）に分析を依頼した。

その結果は、金0.5g/tonという数字であった。この数字はある程度、鉱床学の知識がある人であれば、誰でもすぐに判るが、まったく採算には合わない品位であり、お世辞にも有望とは言えないものである。

ところが、ここでも再び無知は男に味方した。0.5グラムでも何でも、この人にとっては“金が入っていた”という事だけが頭に入ったのである。従って、さっそく、鉱区を願い出て許可されるやすぐに坑道を開いて採掘にとりかかってしまったのである。専門家はみんなやめろと忠告したが、まったく耳をかさなかった。

そして、目ざす畑の下の鉱脈に当たったところが、何とそこが地表部からわずか10~15m下っただけなのに、金の含有量が10グラムから100グラム（いずれも鉱石1トン中の含有量で、現在では5~7グラム以上あれば採算がとれるとされている）という大富鉱体に着脈してしまったのである。

しかもここは、地質的には日本の大金山とは似ても似つかぬ中〜古生層の分布地で、今までにはすべての学説がこのような所は金や銀の鉱床は無いか、あってもごく小さいものでとても経済的に引き合うものではないとされていた所である。

ここで再び、大先生にお伺いをたてることになるのだが、大学の先生というのはやはり一般常識や今までの学説には弱い。アドバイスとしては「金の鉱山として経営するのは不安がある。鉱脈はすぐになくなってしまふから、やめなさい。」といったものであった。

しかし、ここで再びくだんの百姓氏は、大権威と常識に挑戦する道を選んだのである。その結果、鉱脈はなくなるどころか下でどんどん大きくなり、鉱山や全盛時代を築いて今に至っている。

先生は、この鉱山を管轄する通産局へ時々電話して、「あの鉱山は未だ操業しているか？」と問い合わせているということであるが、「益々隆盛のようです」という報告を聞いたたびにさぞや複雑な心境であったろうと推察される。

前置きが少々長くなりすぎたが、私がこの鉱山の近接鉱区を調査して分析用のサンプルをリュック一杯と段ボール箱一つにつめて、重い思いをしながらようやく帰りの汽車に乗り込んだ時のことである。何とか空いた席を確保して座ったものの、みればそのボックス席は一目でそれと判る黒いサングラスと入れ墨のいかにもこわそうなオニイさんが、ふんぞり返って2人分の座席を占めていた。私は、あまりオニイさんとは目を合わせないようにして小さくなって座った。オニイさんの隣には私より少しばかり若そうで、二十才になるかならないかという年かっこうの若者が、これも又、小さくなって座っていた。

オニイさんは、車内販売の酒とつまみをやりながら、色々とスゴ味のきいた声で私や隣の若者に話しかけてきた。話の内容は、出入りの話しやら、何やらそれはそれは恐ろしい事ばかりである。当方としても、相手の気分を悪くするようなことは極力さげなくてはマズイと思い、適当にハァ…ハァと合づちを打つぐらいである。

そのうちに、私の商売（仕事）について聞かれる事になり、鉱山の調査をして歩くヤマ師ですと話して、今回調査して来た鉱山について上に書いたようなエピソードをほんの少しばかりしゃべったところが、急にオニイさんの態度が変わった。

今までのコワそうな態度はどこへやら、しきりに当方の話しを感心して聞くのである。言葉づか

いまで変わった。こっちが気持悪くなるくらいである。

理由は良く判らないが、鉱山、ヤマ師という言葉がオニイさんの同業者か彼等のはかり知れない世界のひびきとしてきこえたためかと思う。

ここで面白かったのは、オニイさんの隣の若者である。私が話しをして打ちとけたのに気を良くしたのか、この手で行けば、オニイさんとも仲良くなれると思ったのか、急に自分の仕事やら身の上話などをペラペラとしゃべりはじめた。こっちが別に聞いているわけでもないのに…

オニイさんも少々びっくりして、若者の話しを聞いている風情であったが、若者がトイレに立った時、私の顔を見てニヤリとして「アノ野郎、俺のことこわいものだから、ヘラヘラとつまらない事ばかり、しゃべりまくっている。」と言ったのが印象的であった。

やがて、終点の駅で3人はホームに降りたが、若者は頭を下げるとようやく重圧から解放されたという様子で、大きな荷物を持ってそそくさで行ってしまった。

私は鉱石でズッシリと思いリュックと段ボールの箱を持って降りようとしたが、入れ墨のオニイさんは私がいいと言っても聞かないので、サンプルのぎっしりつまった段ボールの箱（20kgはあったと思う）をかかえて、私の乗りかえた列車の中まで運んでくれ、大層親切にしてくれた。私は丁寧に礼を言って別れた。

それから、もう一列車乗り継いで、ようやく我家に帰りついたが、その間、善良そうな一般市民は誰一人私の重い荷物を運ぶ手伝いはして下さなかった。

